説教20221023エレミヤ書14：7-10、19-22ルカ18：9-14「主よ、憐れみを」

今日のテーマはうぬぼれです。うぬぼれというのは聖書が説く大きな罪の一つでありまして、それは高慢の罪とも言います。罪というのは神に対する人間の正しくない姿のことですから、今日のルカ福音書の「自分が正しい人間だとうぬぼれて」いるファリサイ派の人のたとえを通して、イエス様は、自分のうぬぼれの罪のことに気付かない人間のことを皮肉っているのです。

このファリサイ派の人の姿は、一読しただけで、うぬぼれた人であり、他の人たちと較べて自分を誇っている、いわば嫌な人物であることが分かります。片や、徴税人は神の前にへりくだって、神に自らの罪の赦しをこいねがい、憐れみを求めている信仰者の模範的姿であると言えるでしょう。

ですから、今日のルカ福音書の箇所は、私たちが自らのうぬぼれの罪に気が付き、それを神の前に悔い改めて、その罪を赦してもらうための入口となるような御言葉なのですが、実は、この絡みついて来るうぬぼれの罪から私たち人間が解き放たれることの難しさも、皆さん、既にご存知のことであられることでしょう。

なぜ、私たちはうぬぼれの罪に陥ってしまうのでしょう。それは、第一には、この罪が、全ての人間の心のうちにもともと植え付けられているからでありましょう。あの使徒パウロも、キリストの僕としてへりくだってお仕えした生涯のうちに、こんなことを言いました。

コリントの信徒への手紙二/ 12章 07節

また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。

この様に、パウロは自分自身の内にある、うぬぼれへの傾きを厳しく自覚した上で、その身に与えられた病気をもへりくだる為の恵みとして受け入れたのでした。

このパウロの言葉から、私たち人間の全生涯は、うぬぼれの罪との戦いであることが分かることでしょう。

ところで、うぬぼれるということがなぜ罪かと言いますと、それが神と人との仲を引き裂き、又、人と人との仲をも引き裂くおおきな思い違いであるからです。このファリサイ派の人は、せっかく神殿に昇りながら、その心の中は上の空で、神様のことなんか少しも思っていないのです。この時の彼の心を占めていたこととと言えば、一つには自分が正しいというプライドと、それに較べて他の人たちは劣っているという優越感でした。この様に彼と神様との間には溝ができてしまっているのです。そして、言うまでもなく、彼と、他の人たちとの間にも溝が生じてしまっているのです。何かこの様に語って参りますと、悲しいかな、現代人は将に、このうぬぼれの罪に深くはまり込んでしまったと思わざるを得ません。

そして、私たちが、うぬぼれの罪に陥ってしまう第二の理由は、それが、個人の罪にとどまらず、共同体の罪であるということです。このファリサイ派の人のように、うぬぼれるには相手が要ります。自分と比較して劣っていると思える相手が必要なのです。そのようにうぬぼれた人は相手と結びつき、その相手もまた同じようにうぬぼれることが出来る相手を連れて来るというわけです。ですから、ここにいわば、うぬぼれの共同体が形作られるのです。又、この徴税人は、もともと徴税人仲間という共同体に属していながら、そこを抜け出て一人神の御前に立ったのですけれども、やはり一人ではなく徴税人の共同体を体現する人間の一人なのです。

この二つの理由、うぬぼれの罪が、私たちの全生涯にわたって絡みついて来ることと、この罪が個人の罪にとどまらず共同体全体の罪であるということによって、私たちがこの罪から解放されることの非常な難しさがあるのだと思います。

今日のルカ福音書の聖書箇所を一読して、よし、私は今から一切うぬぼれることを止めようと決心しても、それが簡単に実現される訳ではありません。

私自身の実体験も思い起こしながら黙想していきますと、自分のうぬぼれの罪が打ち砕かれるには、実際に辛い経験を経なくてはならないでしょう。そのような具体的なつらい体験がきっかけとなって、人は神の前にいわば理由もなく招かれ、そこで罪の赦しをこいねがうようにされるのです。

 18章 13節

ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』

神に招かれるのに理由はありません。人間の目から見れば何か不思議な成り行きで教会に招かれたということもあるでしょう。そこに、人間的な理由づけや原因を探したとしても意味はないのです。そして神に招かれれば、ただ、神に対してへりくだって、「神様、私を憐れんで下さい」と祈るのがよいのです。

次に、うぬぼれの罪が共同体全体の罪であるということですが、このことも抽象的な事ではなくて、実に現実的な事です。今の日本という共同体にもかなりうぬぼれの罪が蔓延している様です。今の社会にあって、孤立やいじめ、自殺に至るまでの絶望の問題が山積しているのには、このうぬぼれの罪が社会に蔓延していることと関係があるでしょう。

今日のエレミヤ書14章 07節で、預言者エレミヤは

 我々の罪が我々自身を告発しています。主よ、御名にふさわしく行ってください。我々の背信は大きく／あなたに対して罪を犯しました。

と主なる神に祈っていますが、これは神の民の共同体イスラエルが、バビロンの地へと連れていかれ、崩壊し始めたころに祈られた祈りです。エレミヤは早いうちから神の民の、うぬぼれの罪に気が付いていたので、この様に祈ることが出来たのですが、しかし多くの神の民たちは自分のうぬぼれの罪に気が付かず、そのため、主なる神は

「彼らはさまようことを好み、足を慎もうとしない。」主は彼らを喜ばれず、今や、その罪に御心を留め、咎を罰せられる。と言われたのでした。

主なる神は、この後、この民のうぬぼれの罪を悔い改めさせるために、実際に７０年にもわたるバビロン捕囚という苦難のときを神の民にお与えになったのですが、一言にバビロン捕囚の苦難と言っても筆舌に尽くしがたい苦難が彼らを襲ったことが、エレミヤ自身も気が変になりそうな思いであったような次の祈りから推し量れます。

エレミヤ書/ 14章 19節

あなたはユダを退けられたのか。シオンをいとわれるのか。なぜ、我々を打ち、いやしてはくださらないのか。平和を望んでも、幸いはなく／いやしのときを望んでも、見よ、恐怖のみ。

しかし、それでもエレミヤは主なる神に憐れみを求め、すがりつくことを止めませんでした。

 21節

我々を見捨てないでください。あなたの栄光の座を軽んじないでください。御名にふさわしく、我々と結んだ契約を心に留め／それを破らないでください。

この様に主なる神に祈り続けた結果、エレミヤ自身は神の民たちからは離され、エジプトへと落ち延びたという成り行きは、又、神様の皮肉な御計らいというほかありません。

これまで、うぬぼれの罪、そしてその罪からの赦し、そして祈るということが抽象的な考えなどにとどまることではなく、とても具体的現実的な出来事であることを見てきましたが、それでは、現実に地上に建てられた神の教会は、このうぬぼれの罪の現実とどのように対決していけばよいのでしょうか。

私たちが、この様に教会に集められ、主なる神の前にへりくだって、自らのうぬぼれの罪を打ち砕かれるということは、とても現実的で、目に見える営みであります。私たちは、この様に集められ、ただ説教や祈りの言葉を文字情報や意味としてだけ受け取っている訳ではありません。それ以外にも、説教者の表情や立ち居振る舞いなどにもよって、色々なことが伝わっていくことでしょう。そしてそれは説教者からではなく、周りにいる人たちの表情や姿によっても互いに影響し合っているのです。教会の、そういったキリストの体としての生きた営みそのものが丸ごと、私たちが神の民の共同体として建てられていく過程なのです。

詩編/ 042編 002節に

涸れた谷に鹿が水を求めるように／神よ、わたしの魂はあなたを求める。とうたわれていますが、これは目に見える教会の営みの姿を目に見える形で詠った歌と言えるでしょう。

鹿は決して、お互いを見捨てないという性格だそうですが、これは人間より全然よい性格ですね。この様に、純真忠実な鹿が群れとなって、目に見えないキリストという命の水を探し求める姿をたとえて、今の教会の見える営みを思い描いていきたいと思います。

私たちはこの世の共同体にも属していますので、その中で、当然、うぬぼれの罪によって傷つけられたり、或いは、自分自身もその罪の虜となってしまって、知らず知らずのうちに人を傷つけてしまうということも起こり得るでしょう。とにかく、そういう共同体での生活によって私たちは疲れ果ててしまいます。

私たちは、教会の営みにおいて、そのような世俗のうぬぼれによる囚われや慣習を持ち込まないように気を付けねばならないでしょう。そうして、うぬぼれというのは一時的ではありますがとても心地よく私たちを誘惑するものですから、それを断ち切るために、私たちはこの徴税人の様に、『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』と、教会で心を合わせて祈っていく必要があります。そのような共同の祈りを通して、教会は祈りの共同体として建て上げられていくことでしょう。

最後に教会が建て上げられていくための鍵はやはりイエス様の御言葉です。

ルカ福音書 18章 14節

言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。私たちのこの世でも営みは、高ぶれば低くされ、低くされれば又高められる、ということの繰り返しです。そういう意味で、一旦へりくだれば、それでもうよし、というわけではなくで、やはり、この高くされたり低くされたりの繰り返しは、この地上にあって、個人の全生涯にわたって繰り返されることですし、又、この世界の国々の歴史を見てもそのような波は見てとれることでしょう。この様な繰り返しの中でエレミヤも、気が変になりそうな思いで、ひたすら主なる神に祈りをささげたのでしょう。

しかし、今や、イエス様がこの世にまで来られてこの御言葉を語られました。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

イエス様の十字架の姿を思い浮かべたらわかり易いですが、イエス様こそ、神の前に最もへりくだり、それから最も高められて、天の神のみそばへと高められた人の１人目となられたのです。このことがイエス様の具体的現実的な営みであります。そして御言葉にありますように、「だれでも、へりくだる者は高められる」のです。つまり、イエス様に倣って、彼のあとにへりくだって聞き従って行く者は誰でも、イエス様の様に現実的に天の国へと挙げられるということがこの御言葉によって言われているのです。

エレミヤは、何か切羽詰まって「主よ、あなたは我々の中におられます。」とインマヌエルの主を告白しましたが、イエス様の召天の現実を知っている私たちは、そんなに焦ることなく、主イエスを私たちの内にお迎えして、安心して、御言葉に聞く歩みを最後まで進めて参りたいと願います。

祈り

天の父

主よ、私たちはこの地上にあって、数多くのうぬぼれの罪に陥っています。どうか罪深い私たちを憐み、赦して下さい

御子イエスが最後まであなたにへりくだって従ったように、私たちも最後まで御子に従って行くことが出来ますように。そして、最も低いところから最も高い所へと挙げられた、御子の復活の道筋を、私たちも迷うことなく歩んで行くことが出来ますように。

救いのときを迎えている現代にあって、又、悪の力も高ぶりをみせ、私たちは様々な誘惑や脅威にさらされていますが、私たちが、ただ御子イエスの御言葉にへりくだって従って行くことが出来ますよう、信仰を強め、常に主の平和へと導いて下さい。